

# 幼小の学びをつなぐ

## ～接続期カリキュラムの作成に向けて～

田代高章・大野眞男・今野日出晴\* 千葉紅子・渡邊奈穂子・高橋文子・本宮和奈・吉田美奈子・  
伊藤りつ子・川村真紀\*\*, 菅野亨・高室敬・板垣健・川村晃博・檜木航平・久慈美香子\*\*\*  
\*岩手大学教育学部, \*\*岩手大学教育学部附属幼稚園, \*\*\*岩手大学教育学部附属小学校

(平成31年3月4日受理)

### 1. はじめに

幼稚園においては、幼稚園の生活全体を通して、幼児に生きる力の基礎を育むことが求められている。そのため、幼稚園教育の基本を踏まえ、小学校以降の子供の発達を見通しながら教育活動を展開し、幼稚園教育において育みたい資質・能力を育むことが大切である。

新・学習指導要領等では、幼稚園から高校まで「社会に開かれた教育課程」の実現を通して3つの資質・能力を育成するということで整合性が図られた。

幼児教育で育みたい資質・能力として「知識・及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3つが示されている。さらにこの3つの資質・能力は、遊びを通した生活全体の中で育まれるものであるが、年長児後半に期待される育ちとして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に示された。

さらに、小学校指導要領の各教科において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること」と示されている。これらの姿を小学校の教師とどのように共有し、連携を図っていくのが、幼小接続において求められている課題と考えている。

### 2. 本研究にあたって

園内では、幼児の育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から振り返り、教育課程や指導計画の見直しに取り組んでいる。

また、昨年度、小学校の教員とも、幼小交流活動での子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として語り合い、「育ち」を共通の言葉で理解することができた。

そこで、今年度は、接続期のカリキュラム作成に向け、幼小交流活動を窓口に、接続期の教育の在り方を探ることとした。

### 3. 研究の内容と方法

幼小交流活動を窓口として、幼小接続教育の在り方、子どもの育ちについて小学校教員と共有化を図る。

- (1) 計画・実施・反省を幼小の教員で共に行う。  
その際、5歳児の教育課程をもとに、10の姿の視点から、子どもの育ちや保育・授業を構想し、振り返る。
- (2) 5歳児の教育課程を見直す。

### 4. 実践

#### 実際の交流活動と、その計画・反省について

これまでも本園の幼小交流活動は、年長児と1年生が一緒に活動することで相手に親しみをもち、人とのかかわりを広げていくことをねらい、同じペアで1年を通して活動する形で実践してきた。毎年4回程度の交流を行ってきており、その時期・季節に合わせて活動内容を考えてきた。

今年度は、幼小の教員で共に、5歳児の教育課程をもとに次のように交流活動を計画・実践し、反省をしてきた。

#### 第1回交流活動(6/11)

##### 1) 交流のねらい 「春となかよし」

年長児	活動を楽しみ、ペアの児童と仲良くなることできる。
1年生	ペアの園児に優しく接しながら活動を楽しみ、園児と仲良くなることできる。

## 2) 活動計画作り (6/6 (水))

1回目の交流で、幼小の教員が最も大事にしたかったのは、1年の交流活動のスタートにあたるので、互いにペアとなる1年生・年長児に親しみをもてるようにすることである。それは、本園の5歳児I期(4月～5月)の教育課程にある「人とのかかわりの体験(社会生活とのかかわり)」ともつながっていると考えた。

### 【本園の5歳児I期の教育課程～一部抜粋～】

発達の過程 年長組になった喜びや自覚を持ち、年長児としての生活に安定していく時期
・いろいろな先生や友達とのかかわりの中で親しみをもったり、様々な刺激を受けたりして、いろいろな人とのかかわりを深めたり広げたりする。 (社会生活とのかかわり)

年長児は、4月～5月に新しい生活に安定していく中で、園内で先生やクラス・学年の友達、年下の園児などいろいろな人とのかかわりを広げている。その体験をもとに、小学校1年生とかかわることにより、新たな刺激を受け、人とかかわりを広げられるのではないかと、そして、それが楽しい体験となることでその後の交流活動につながるのではないかと話し合った。

また、小学校学習指導要領の「生活科の内容の全体構成」において次のように示されていることも踏まえ、校庭の自然を教材にすることにした。

### 生活科の内容の全体構成～一部抜粋～

身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容	
(5)	<b>【学習対象・学習活動等】</b> ・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわったりするなどの活動を行う。 ≪思考力、判断力、表現力等の基礎≫ ・それらの違いや特徴を見つける。 ≪知識及び技能の基礎≫ ・自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気づく。 ≪学びに向かう力、人間性等≫ ・それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

(6)	<b>【学習対象・学習活動等】</b> ・身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を行う。 ≪思考力、判断力、表現力等の基礎≫ ・遊びや遊びに使う物を工夫してつくる。 ≪知識及び技能の基礎≫ ・その面白さや自然の不思議さに気づく ≪学びに向かう力、人間性等≫ ・みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする。
-----	--

これらをもとに、1年生が見つけた校庭の竹の皮を使って、年長児と共に魚釣りごっこを行うという活動を計画した。身近な自然である竹の皮を用いて、遊びに使う物を工夫して作ったり、作った魚で遊ぶ中でペアと楽しみながら遊びを作り出そうとしたりすることにより、ねらいにある「人とのかかわりの体験(社会生活とのかかわり)」ができるよう援助しながら交流活動を行うことにし、実践を行った。

## 3) 活動の反省から

6月に入っており、校庭には竹の皮以外の自然素材が少なかったが、幼稚園から持ち込んだ草花やマジックペンやセロテープなどの工作道具を用いて様々な魚を作り、園児と1年生のペアで魚釣りごっこを楽しんだ。様々な姿が見られた中で、次のエピソードについて共に考えた。これは、主な活動が始まる前に、ペア同士が簡単に会話をする「なかよしタイム」という時間での姿である。



### 【初めての出会いに戸惑う園児の気持ちに、寄り添って行動しようとするA君の姿】

憧れの小学校に行くことに期待を持っていたものの、初めての場所に緊張する園児たち。そんな中、なかよしタイムになると、1年生が園児に話しかけ始めた。1年生のA君は、園児に名前や好きな食べ物を聞き、いろいろ気持ちをほぐそうとするが、硬い表情のままの園児。そこで、「僕たち

が作った名札をつけてあげるよ」とつけようとしたものの、足を曲げて座っていた園児の足が自分の腕に当たりそうになり、名札を付けたい胸元に手が届かない。園児に足を伸ばしてほしい様子だったが、園児の表情から気持ちを察したのか、ちょっとおどけた口調で「こっちからつけようかな」と自分が位置を変え、つけやすそうな場所を探していた。そんなことを数回繰り返すA君の姿を見て、園児は曲げていた足をそっと伸ばした。



A君は、本園の卒園生である。入園当初から様々なことに興味を示し、関心を持ってやってみようとする一方、自分の思いを主張しつつも相手の思いを受け止められず手が出てしまうこともあった。2年間の園生活の中で少しずつ気持ちが安定し、相手の気持ちを受け入れることができるようになってきていた。小学校入学当初も、新たな学校生活に関心を示し張り切っている一方で、自分が正しいと思うと相手に強く主張してしまう面は見られていた。そんなA君が、緊張している年長児の気持ちを汲み取り、自分はどう動いたらいいか、考え行動している姿は、いろいろな人とのかかわりを重ねてきた中で、自分の在り方を見つめ直した姿ではないかと考えた。また、園児も緊張している自分に何とかかかわろうとするA君の姿に気づき、足を伸ばして名札をつけやすくしており、年長児なりに相手の気持ちを感じ取っているのだと考えられる。親しみをどこまで持てたかは定かではないが、1年生とかかわろうと気持ちが動いていることが感じられ、「社会生活とのかかわり」につながる体験をしているのではないかと考えた。

この他にも、1年生が園児に「どんな魚を作りたいか」聞いたり、「好きな模様にしていいよ」と園児の思いを尊重して声をかけたりしている姿や、1年生の働きかけにより気持ちが動き、素材とかかわって遊ぼうと動き出す園児の姿を、様々なペアから見取ることができた。

#### 4) 5歳児の教育課程I期を見直す

発達の過程	年長組になった喜びや自覚を持ち、年長児としての生活に安定していく時期
・色々な先生や友達とのかかわりの中で親しみを持ったり、様々な刺激を受けたりして、いろいろな人とのかかわりを深めたり広げたりする。 (社会生活とのかかわり)	

1回目の幼小交流活動において、子ども達がこのような人とのかかわりの体験をしていることを幼小の教員間で確認することができた。そして、幼稚園の教師が「いろいろな人」の中に小学校1年生とのかかわりも含まれると認識することで、この時期の指導計画を考える際、幼小交流活動の1回目がここに位置付けられてきた意味を再確認することにつながった。

・いろいろな素材に触れたり、表現の方法を知ったりして、表現の幅を広げていく。 (豊かな感性と表現)
--

また、1年生と竹の皮で魚を作ることは、年長児にとっては新たな表現方法でもあった。幼稚園の園庭にも竹の皮があり、これまでも遊びに取り入れてきたが、細かく裂く感触を楽しんだり、他の草花や土と合わせて料理に使ったりする使い方が多かった。皮に絵を描いてみたり、クリップなどを使って室内でも遊べる道具にしたりすることは、園児や幼稚園の教師にとって新たな発想だった。園児にとって素材を使った表現の幅が広がる体験ともなった。1年生とのかかわり(社会生活とのかかわり)が、ものとのかかわり(豊かな感性と表現)にもつながり、年長児の遊びを中心とした生活を豊かにするものになっている。幼小交流活動での学びを見取ることから、5歳児I期の教育課程において、位置付けられている体験の意味を再確認することができた。

#### 第2回交流活動(7/11)

##### 1) 交流のねらい「夏となかよし」

年長児	活動を楽しみ、ペアの児童と仲良くなることできる。
1年生	ペアの園児と夏の自然をつかった遊びを楽しみ、園児と仲良くなることできる。

## 2) 活動の計画作り (7/4)

今回の交流で「夏」の素材として考えたのは「草」である。校庭に多種類の草が生えていて、それを使った遊びを1年生が生活科の中でできてきていることや、年長児も園庭の草を使って遊んでいる姿が見られていたからである。1回目の交流で、「たけのこの皮」という同じ素材から多様な魚ができたように、できるだけ子ども達の豊かな発想を生かして、草を使ったいろいろな遊びをしてほしいということが幼小の教師間で共通な願いとなり、どのような活動をしたらよいか協議した。その際、2回目の活動における本園の5歳Ⅱ期(6月～9月)の教育課程とのつながりも考えた。「人とかかわりの体験(協同性)」とつながっていると考えた。

### 【本園の5歳Ⅱ期の教育課程～一部抜粋～】

発達の過程	友達とのつながりの中で、互いに考えやイメージを出し合って、試したり工夫したりしながら、一緒に遊びを進めていくようになる時期
・友達と相談したり、協力したりしながら、共通の目的に向かって取り組む。(協同性)	

「友達」を「ペアの1年生」ととらえると、2回目の交流となり慣れてきたことで、互いのイメージや考えを出し合い、一緒に協力しながら遊びを作り出していけるようにしたいと考えた。

また、小学校指導要領生活科の内容に次のように示されていることも踏まえ、「春」に続いて「夏」の自然を題材とすることにした。

第3章 生活科の内容
(6) 身近な自然を活用したり、身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや生活に使う物を工夫して作ることができ、その面白さや自然の不思議さに気づくとともに、みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする。
遊びはそれ自体が楽しいことではあるが、そこに友達とかかわりがあるとさらに楽しいものになる。競い合ったり力を合わせたりできるからである。遊びそれ自体が互いの関係を豊かにし、毎日の生活を充実したものにしていける。そうした豊かな生活の実現に向かう遊びを作り出していく姿が期待されている。

これらのことから、夏の自然を使って思い切り遊ぶことを通して、ペアの友達とかかわりを楽しめるものにし、自然への気づきも生まれてほしいと考えて活動を構想した。1年生は事前の授業の

中で、草ずもう・葉っぱのしずくりレー・白つめ草の冠作りなどを考えたが、年長児とかかわりの中で出てくる様々な発想を生かし、いろいろな遊びができるよう1年生にも伝え、柔軟に活動できるようにしたいと考えた。

## 3) 活動の反省から

1年生は、交流の振り返りで話し合ったことをもとに、園児と自然な会話をしながらかかわっていた。そのため、すんなりと活動に入ることのできる年長児が多く、校庭の自然(夏の草花)と遊ぶ時間を十分に取ることができた。



教師や1年生が予想したよりも、いろいろな種類の草やたくさんの本数での草ずもう対決になったり、全身で草の感触を楽しみながら坂を転がったりするなど、ペアでやりとりしながら、夏の自然とかかわりを楽しんでいる姿を見取ることができた。

前回の反省を受けて、小学校の担任3人で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から子どもの姿や活動について話し合ったことを持ってきてくれた。それをもとに話し合うことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具体的なイメージを幼小の教員双方で共有することにつながった。以下はその話し合いの一部である。

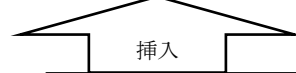
1年担任の見取り	年長担任の見取り
・スキー山の傾斜を使い、ゴロゴロと転がる遊びを考え付いたのが面白かった。自然とかかわりを体験しているのかなと思っ	・やわらかい草に触れるのが気持ちよく、ペアの人と一緒に回ることによって気持ちがつながったような気がする。自然とかかわりももちろんあり、ペアの人との協同性



	の芽生えにもつながると思った。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアの園児がケガしないように、移動中にさりげなくガードしている姿があった。安全面を考えられるという点では、<b>道徳性・規範意識の芽生え</b>の育ちと考えられるのではないかと思った。</li> <li>・そもそも、<b>道徳性・規範意識の芽生え</b>って何だろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアの園児を気遣っての行動なので、<b>社会生活とのかかわり</b>ともとらえられる。<b>道徳性・規範意識の芽生え</b>は、相手の立場に立って行動したり、自分の気持ちを調整したりしながら、決まりを作ったり守ったりすることが含まれる。</li> </ul>

りについてのみ触れている。多様な自然素材とのかかわりが体験できることを教育課程の中にも位置付けることができるのではないかと考え、次のように付け足すことを検討した。

・身近な小動物の生態に関心をもってかかわったり、自分なりに気づいたことなどを図鑑で調べたりしようとしている。(自然とのかかわり)



・身近にある自然素材などを使って、遊びを工夫したり考えたりしながら、自分の興味を追求する。  
(自然とのかかわり、思考力の芽生え)

第3回交流活動 (10/23)

1) 交流のねらい 「秋となかよし」

年長児	創作活動を楽しみ、ペアの園児との仲を深めることができる。
1年生	ペアの園児と秋の自然を使った創作活動を楽しみ、園児との仲を深めることができる。

2) 活動計画作り (10/17)

2 回目の活動から約 3 か月がたち、久しぶりの交流となった。今回も、自然とのかかわりを継続し、「秋」の自然とかかわる活動を考えた。2 回の交流で気持ちが打ち解けてきていることから、これまでの「なかよしタイム」をなくし、クラス全員でじゃんけん列車を行い、気持ちをほぐしてから活動に入ることにした。1 年生が育ててきたアサガオのつと、色づいてきた校庭の葉っぱを使いペアで一つのリースを作り、年長児が持ち帰り、1 年生になってからの活動に期待を持てるような活動にすることにした。3 回目の活動と本園の 5 歳Ⅲ期 (10 月～3 月) の教育課程においては、「ものとかかわりの体験 (自然とのかかわり・生命尊重、思考力の芽生え)」の体験がつながるように活動を構想した。

【本園の 5 歳Ⅲ期の教育課程～一部抜粋～】

発達の過程	友だちと共通の目的をもち、協力し合って遊びや生活を進めていくようになる時期
-------	---------------------------------------

4) 5 歳児の教育課程Ⅱ期を見直す

発達の過程	友達とのつながりの中で、互いに考えやイメージを出し合っ、試したり工夫したりしながら、一緒に遊びを進めていくようになる時期
<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と相談したり、協力したりしながら、共通の目的に向かって取り組む。(協同性)</li> </ul>	

年長児は、慣れてきた 1 年生とのかかわりにおいて、のびのびと自分たちのしたいことを楽しんでいる姿があった。1 年生にとっても、いろいろな種類や本数で草相撲をしたり、草の上を転がったりするのは、自分達だけの授業では見られない姿でもあった。草が豊富にある場所での活動で、思い切り自然と触れることが遊びを楽しくし、試したり工夫したりする姿につながっている。また、慣れてきたペアの友達とのかかわりがあることで遊びがさらに楽しくなっていることに気づかされた。Ⅱ期の教育課程にあるように、ペア (友達) と相談したり協力したりしながら、共通の目的に向かって取り組む姿が見られてくる時期でもある。そのような姿に向かってほしいと願いながら、2 回目の交流をこの時期に行うことに意義があると感じた。

一方、身近な自然である草とのかかわりがたくさんみられたが、本園のⅡ期の教育課程には自然とのかかわりについて小動物 (虫等) とのかかわ

- ・自然とのかかわりの中で、季節の変化などを感じ取ったり、身近な事象への興味関心を高めたりしていく。(自然とのかかわり)
- ・様々な素材、道具、用具を使って、試したり、考えたり、工夫したりしながら自分なりにイメージすることを実現していく。(思考力の芽生え)

また、「秋」の自然を題材として取り上げたのは、小学校指導要領生活科の内容に次のように示されていることを根拠にした。

### 第3章 生活科の内容

(5) 身近な自然を観察したり、季節や行事にかかわったりするなどの活動を通してそれらの違いや特徴を見つけてことができ自然の様子や式や変化、季節によって生活の様子が分かることに気づくとともにそれらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

### 3) 活動の反省から

じゃんけん列車の後、すぐにペアで落ち葉拾いを楽しみ始めた。この時期はまだ一面に色づいた葉ばかりではないが、ペア同士で紅葉した葉っぱを探して歩き、配置を考えながらつるにつけていき、リースを完成させていた。



秋の葉っぱを集めてリースを作ろう。



### 4) 5歳児の教育課程を見直す

発達の過程	友だちと共通の目的をもち、協力し合っ て遊びや生活を進めていくようになる時期
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然とのかかわりの中で、季節の変化などを感じ取ったり、身近な事象への興味関心を高めたりしていく。(自然とのかかわり)</li> <li>・様々な素材、道具、用具を使って、試したり、考えたり、工夫したりしながら自分なりにイメージすることを実現していく。(思考力の芽生え)</li> </ul>	

3回の活動を通し、慣れてきたペア同士ですぐに活動に入ることができ、友達と共通の目的をもってかかわっていることが感じられた。また、ペアの友達とアイデアを出し合いながら、どこにどうやってつけたらきれいなリースになるか考えている姿は「思考力の芽生え」につながり、幼小交流活動の中でも、5歳児Ⅲ期に位置付けられてい

る体験の意味を再確認することができた。また、葉の色づき方が様々で、すっかり紅葉している葉もあれば、緑から変化しつつある葉もあり、そこに面白さを感じている子もいるなど、自然とかわることによる発見や興味関心が生まれている。そこを「季節の変化を感じ取り」と捉えてよいのか園内で話題になった。今後、吟味が必要でまだ修正に至っていないが、私たちが子ども達に豊かな体験を育み、小学校につなげていくためには、教育課程の中にある言葉が表している意味を共通理解する必要があると感じた。

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に活動の計画・実施・反省を行うことで、幼小の教員間で育ちの連続性を感じながら実践・協議し、幼小の学びをつないで理解することができた。また、5歳児の教育課程を、子どもの姿を根拠に見直すことにつなげることができた。

### (2) 課題

- ・今年度の成果をもとに、本園の「5歳の教育課程」を、幼小の学びのつながりがより見えやすくなるよう修正していきたい。

### 【参考・引用文献】

- 1) 幼児教育じほう 2017. 5 より  
無藤 隆「論説 幼児教育の新しい姿から小学校教育の接続を見通す」  
奈須 正裕「論説 幼児教育と小学校教育の接続—学びの履歴をつなぐとは—」
- 2) 平成 29 年度広島大学附属三原学校園研究紀要
- 3) 平成 30 年度附属幼稚園研究紀要
- 4) 平成 30 年度附属小学校研究紀要
- 5) 北上市幼児教育振興プログラム
- 6) 平成 30 年度岩手県国公立幼稚園・こども園教育研究大会 第3分科会資料
- 7) 幼稚園教育要領解説
- 8) 小学校学習指導要領 生活科解説